

宇宙短歌・俳句コンクール

概要: 生誕150年を迎えた正岡子規を輩出した愛媛・松山の「短歌・俳句」で宇宙を表現することにより、宇宙を身近に感じ、興味関心を深めてもらうため、「宇宙の歌・宇宙の句」を募集。入選・入賞作品を会議会場をはじめ、県内各所に展示。平成29年4月に表彰式を行い、プレゼンターとして、アジア人女性初の宇宙飛行士 向井千秋さんが登場した。

募集内容: (1)「宇宙の歌」短歌部門

向井千秋さんが、宇宙空間で詠んだ上の句「宙返り何度もできる無重力」に続く、下の句を募集。

(2)「宇宙の句」俳句部門

「宇宙」をテーマにした俳句を募集。

募集期間: 平成29年2月1日(水)～2月28日(火)

応募・選考状況: (1)「宇宙の歌」短歌部門 応募総数は1,011首

一般の部 向井千秋賞1首、優秀賞3首、入選20首

ジュニアの部 坊っちゃん賞1首、マドンナ賞1首、優秀賞3首、入選20首

(2)「宇宙の句」俳句部門 応募総数は1,442句

一般の部 選者(松山俳句協会理事7名)毎に特選3句、入選10句

ジュニアの部 選者(松山俳句協会理事7名)毎に特選3句 入選10句



宇宙空間で詠んだ「宙返り何度もできる無重力」を解説



入賞作品の展示の様子



向井千秋氏より表彰状の授与

宇宙短歌 《ジュニアの部》

「宙返り何度もできる無重力」

に続く下の句

坊っちゃん賞

僕がまわると宇宙もまわる

清水 琉生

マドンナ賞

家でやったら二回が限界

阿部 紗也

優秀賞

体育の授業もここでしたいな

水中 ひなた

ぞうさんだつてはこべちやう

赤瀬 稔

とびたいとびばこ目ひよう百だん

二宮 由成

入選

宇宙のひみつ星より多い

林 結唯

星から星へジャンプ大会

曾我 周海

つぎのほしまでまわりつづける

橋本 和佳

自分の夢を大きくかえる

勇徳 響希

ここはまさにでんぐり宇宙

毛利 航太

入選 (つづき)

ぼくのとなり小惑星

大西 陸斗

地球と共に私も回る

藤原 楓

宇宙の糸がぼくをあやつる

横溝 惺哉

地球を見つければ日本を見つけて

寺坂 透陽

地球でできない思い出つくる

中矢 彩萌

静かな宇宙で静かに回る

林 航

ふんわりただよう地球とぼくと

宮部 碧大

くるくる回るゼログラビティ

立花 譲

ピアノもち上げ記ねんさつえい

藤岡 希帆

うちゅうにいけばりすになるぼく

横道 玄

無限ループで続く永遠

坂井 寛子

どこまでも続く無限の世界

豊田 彩華

スタントマンが泣いている

原 綾佑

ぐるぐるぐるとギネス記録を

尾崎 陽

そしたら私も金メダルかな

宗近 みと

宇宙短歌 《一般の部》

「宙返り何度もできる無重力」

に続く下の句

向井千秋賞

わが子もグルンお腹の中で
山崎 彩子

優秀賞

鞠のごとくにうれひを捨てて
板倉 裕子
羊水に浮く胎児にも似て
西村 淑
特大プリン理想の出来栄え
本田 しおん

入選

鳥にもなれるまた魚にも
井芝 千章
五輪選手の背に宙を見る
岩田 早希子
超超難度で宇宙を拓く
宇和上 正
壺中の天地茫漠として
太田 辰砂
昼と夜とを見てまわりゆく
大森 定謨
遠き地球に臍の緒繋ぐ
門屋 朋子
小窓の外は故郷の青
河本 満

入選 (つづき)

愛顔もまわる無限の宇宙
菊池 太
過去現在未来夢が輝く
薦田 喜加
命授かり地表に落つる
竹内 聖治
星の数ほど夢が広がる
竹田 流星
君は布団ででんぐり返り
谷井 紀夫
宇宙は子宮わたしは胎児
谷岡 美樹
母なる青き船と並びて
谷口 みち佳
落ちず折れぬが細る我が骨
千田 康治
我が子と一緒に宇宙で遊ぶ
橋田 恭子
孫を六人抱えて嬉し
幅 茂
涙流れず顔はため池
本田 いづみ
十億年の胎児の記憶
宮下 嘉納子
越後獅子の唄口ずさむ我れ
安田 清一

特選

初夢やぼくは宇宙で宙がえり ※

愛大附属小 川九 開

評

元日の夜から二日にかけてみる夢を初夢といいますが、宇宙への夢がどんどんふくらんでいく少年らしい句です。「宇宙で宙がえり」の軽快なリズムがいいですね。宇宙飛行士へのひそやかなあこがれも感じられます。

お月さまこんやはだれがかじったの

垣生小 宮田 晃希

評

お月さまは丸く見えたり、半分に見えたり、笹舟のように見えたり、ほんとうにふしぎですね。「だれがかじったの」と問いかけた純真なことばをとても可愛らしく思います。母と子のほほえましく幸せな秋の夜です。

流れ星ぼくを見ながら流れてく

垣生小 大塚 劉生

評

晴れた夜空をながめると、ひとすじのラインをえがいて星が流れていくことがあります。なんともいえぬ心ときめきますね。「ぼくを見ながら流れていく」という表現に何か願いがかなうような予感がします。

入選

はやぶさが空に描いた虹一つ ※

豊田 彩華

空の星霧氷といっしよに降りてくる

田中 莉央

おぼろ月きょうりゆうの声ひびきます

兵頭 太嘉

オーロラの明かりだ春のうちゅうから

伊藤 彩音

夏の夜の空のそうじ屋ほうき星 ※

行方 優実

金星へたんぽぽのわたとんでいけ ※

川九 新

掴めない瞳の中に星涼し

柏木 美紅

見つけたよ宇宙へつづく春の雲

平岡 香乃

冬の月ずっとわたしのの上にある ※

中矢 乃々華

地球からいつか見たいな月の裏

横溝 麻志穂

※印は複数の選者が選んだ句

特選

はやぶさが空に描いた虹一つ

美濃加茂市立西中

豊田 彩華

評

〈はやぶさ〉がもたらした〈虹一つ〉華麗さの極みともいわれる七彩の虹の美しさ、明るさが未来への夢と希望を暗示している。未来を見つめる作者の、生きる姿勢のうかがわれるたのもしい作品である。

公園にだあれもないひでり星

家串小 織田 拓海

評

〈ひでり星〉は一般に赤い。なかでもアンタレスは燃えるような赤色といわれる。日照り続きの酷暑の空に赤く燃える星たち。そうした天上の景とだれもない公園との対比に、作者の感性のよろしさを感ずる。

ながれ星ばあちやん長生きしてください

家串小 伊勢 小葉

評

科学的な根拠には関りなく、人々は流れ星に吉兆を占い夢を託す。一瞬の間に願いを言葉にすることは至難である。作者の祈りは実に素直で心にいつも思っておられるのであろう。心あたたまる作品である。

入選

オリオン座澄んだ夜空に煌めくよ

田中 友梨

向日葵は地球に生きる太陽だ※

内田 実里

夏の星きょうだい三人なかよしだ

末弘 哲也

学校のおとまりキャンプ星きれい※

渡邊 魁斗

冬の風むらさき色の月が出た

高魚 涼

にじのはしわたっていきたくもの上

瀬野 彩夏

たんぽぽのわたげとび立つうちゅうへと※

安倍 由花子

冬銀河星のおしゃべり楽しそう

高村 晃生

トス上げる球体宇宙めく九月

藤井 和真

冬の月ずっとわたしの上にある※

中矢 乃々華

※印は複数の選者が選んだ句

特選

冬の星まんげきようの中にいる

家串小 中尾 紗唯

評

鏡の板を使った筒を回しながらのぞく万華鏡は回すたびに美しい模様が見える。冬の星はまるでその万華鏡のようだという句。望遠鏡の中に見える星の数々に名前があり、物語があるのに驚く気持ちもうかがえる。

オリオン座たくさんの星とつながるよ

串原小 三宅 英暉

評

冬の星座で一番みつけやすく大きなオリオン座はギリシア神話の猟師の名。星座の中で最も明るいベテルギウスや三つ星を目印にしてつぎつぎに他の星座をみつけることができる。「つながるよ」で他の星がみえてくる。

冬の月ずっとわたしのの上にある

垣生小 中矢 乃々華

評

どこまで歩いてもついてくる月を見て感じるこの思いは、きつと世界中の人に共通する思いで、なぐさめられたり励まされたりしているはず。ずっと私の上にあるという安心感と神秘的な冬の月の輝きが伝わってくる。

入選

はやぶさが空に描いた虹一つ ※

豊田 彩華

公園にだあれもないひでり星 ※

織田 拓海

しもばしら星のせかいにあるのかな ※

滝野 晴斗

はるのほしふくらむつぼみみつめてる ※

児玉 凜子

金星へたんぼぼのわたとんでいけ ※

川九 新

同じ空ガリレオ見ていたおぼる月 ※

鳥生 野乃花

流れ星新惑星とまじりけり

八木 雄大

おつきさまきょうはちよつとおおきいね

小林 真生

お月さまこんやはだれがかじったの ※

宮田 晃希

満月の光に負けた望遠鏡

福永 侑夏

※印は複数の選者が選んだ句

特選

金せいをたべてみたいなはるのよる

松野東小 池本 吏来

評

夕方西の空にも見える時は「宵の明星」、明け方東の空に見える時は「明けの明星」と呼ぶのが金星。大きくてもよくかがやく星を見た春の夜。それを食べてみたいと思っただんだ！びっくりしました！

初夢やぼくは宇宙で宙がえり ※

愛大附属小 川九 開

評

初夢の話。昔の子供はせいぜい空が飛べる夢を見たくらいだった。ところが、現代の子供は、スペースシャトルで宇宙旅行に出て、機内や宇宙空間で宙返りをする夢を見る。これは想像ではなく、叶えられることなのだ。

遠足で行けるといいね空の先

椿小 安倍 由花子

評

広大な空の先にあるのは、無限大の宇宙。遠足で行けるのは、せいぜい電車に乗るくらいの短い距離。だけど広い野に着くと、やっぱり大きな空のその先に行けるようになりたいと思う。子供達の夢も無限大なのである。

入選

はやぶさが空に描いた虹一つ ※

豊田 彩華

夏の空星はまるでこんぺいとう ※

服部 琴葉

宇宙ゴミ春一番でとんでいけ ※

清水 煌生

宇宙ではふわふわうかび春のよう

脇坂 はるあ

お正月宇宙でゆっくり過ごそうか

立石 直久

きょうりゅうの鳴き声遠く春の星

織田 凜花

金星にずっと見とれる春の夜

大鳥 未都

しもばしら星のせかいにあるのかな ※

滝野 晴斗

たんぽぽのわたげとび立つうちゅうへと ※ 安倍 由花子

タケコプターつけてのりたいたいわしぐも 原田 泰輔

※印は複数の選者が選んだ句

特選

船上から夏の大三角形さがす

家串小 伊勢 雅姫

評

周辺に灯りのない海の上は、天体観測をするのには最適。クルーズ船などでもよく星空教室が開かれます。作者も船の上から、夏の夜空を代表する三つの一等星を捜しているのでしょうか。

はるのゆめ月でとびばこ三百だん

松野東小 池本 吏来

評

無重力の月面、地球では五段がせいっぱいの飛び箱も、余裕で三百段くらいは飛び越せるかもしれませぬね。近い将来月へ旅行できるようなになったら、「春の夢」ではなく現実に成功するかもしれませぬ。

同じ空ガリレオ見ていたおぼろ月

今治市立乃万小

鳥生 野乃花

評

おぼろ月の浮かぶ夜空、もしかしたらあの偉大な学者ガリレオ・ガリレイも、こんな夜に望遠鏡で天体観測をしていたのかもしれない。何百年もの時を越えて、ガリレオと心が繋がったような気がしたのでしようか。

入選

流れ星宇宙の果てからきたのかな

安江 悠真

冬の空星のかがやきあふれだす

岡原 未空

ポケットに星を集めて春の夜※

伊葉 小夏

冬の星まんげきょうの中にいる※

中尾 紗唯

バラ星雲花びらの色春の赤

藤岡 希帆

はるのほしふくらむつぼみみつめてる※

児玉 凜子

UFOを追いかけ迷う春銀河

曾我 周海

ぼくの夢宇宙飛行士雲の峰

川九 開

金星へたんぽぽのわたとんでいけ※

川九 新

ないしよだよぼくのとうさんうちゅうじん

松岡 由輝

※印は複数の選者が選んだ句

特選

紅葉の地球の色は赤いかな

新宮中 眞鍋 ななか

評

宇宙への旅ももう夢ではなくなつて来ています。初めて宇宙から見た地球は青かったそうですが、紅葉した地球はどんな色をしているのか素朴な疑問が一句になりました。

夏の朝月の形がのこつてる

神戸市立椀台小

藤涛 拓郎

評

夏の朝は夜明けが早いです。白み初めた空に月が出ていることは天文学上当然あるべき現象ですが、作者は「月の形」が残っていると表現しています。淡々とした夏の朝の月を表現するにこれ以上の言葉ないと思います。

闇を切る素振り見守る冬銀河

垣生小 野中 大治

評

寒中の鍛錬を特に寒稽古といいます。この句の素振りは竹刀でしょうかバットでしょうか、何れにしても闇を切る音だけが響きます。冬の夜特に凍空の星の光は鋭く輝いています。鋭い光は厳しさであり優しさでもあります。

入選

流れ星たくさん見るとしあわせだ
今井 伶奈

夏の夜星よねがいのをのせてつて
中江 涼香

向日葵は地球に生きる太陽だ※
内田 実里

宇宙ゴミ春一番でとんでいけ※
清水 煌生

学校のおとまりキャンプ星きれい※
渡邊 魁斗

ポケットに星を集めて春の夜※
伊葉 小夏

帰り道春のせいざが動き出す
山本 文太

雪だるま無重力でも溶けるかな
大田 健介

ロケットでいってみたいなはるのつき
原田 泰輔

なかよしのみんなと見るよながればし
大谷 鈴風

※印は複数の選者が選んだ句

特選

宇宙ゴミ春一番でとんでいけ

春江小 清水 煌生

評

春になると中国から汚れた空気が日本に流れてきます。それを春に吹く強い風が吹きとばしてくれず。宇宙にも沢山のゴミがただよっています。その宇宙ゴミも春一番が吹いてきれいに吹きとばしてほしいものですね。

春のリレー土星の環をひと回り

今治市立吹揚小

曾我 周海

評

春の運動会のリレー。白い線でかかれたグラウンドのまるい円を見ているとまるで土星の大きな輪のように見えたのでしょう。走っている人を見るとまるで土星の環をひと回りしているようだと感じたのです。夢のある句です。

たんぽぽのわたげとび立つうちゅうへと

椿小 安倍 由花子

評

春の野にさくたんぽぽは、花がおわって実になると、白い毛を生じてわたがつぎつぎと風にのってどこまでもどこまでも飛んでいきます。それを「うちゅうへ」ととび立つと見たのです。さながらロケットが飛び立つように。

入選

夏の空星はまるでこんぺいとう※

服部 琴葉

真夏の日宇宙はもつと暑いかな？

眞鍋 ななか

見上げるとかならずさがすオリオン座

山本 彩羽

公園にだあれもないひでり星※

織田 拓海

冬の星まんげきようの中にいる※

中尾 紗唯

はるのゆめ月でとびばこ三百だん※

池本 吏来

夏の夜の空のそうじ屋ほうき星※

行方 優実

もみじの葉宇宙の中では落ちないよ

林 結唯

38まんキロとどくとおもった月に手が 児玉 凜子

ちりばめる宝石いっぱい春の空 渡部 由梨香

※印は複数の選者が選んだ句

特選

桜散り宇宙にひとつ星生まる

西条市 砂山 恵子

評

「ひとつ星生まる」は、宇宙飛行士の油井亀美也さんに因んで命名された「kimiyayui」であろうか。その星は二億六千八〇〇万キロの彼方に存在するが、桜が散ったあとの星空には悠久のロマンが感じられる。

薫風や青き地球の動き出す

砥部町 篠崎 伶子

評

地球が動くということを日常強く意識することはないが、「薫風」という季語と「地球の動き出す」と断定したフレーズがよく響き合っている。地球は青かった！と言った宇宙飛行士ガガーリンの言葉をふと想起した。

ふたつめの太陽になるしやぼん玉

松山市 丸本 美保子

評

大きな「しやぼん玉」が徐々に高みへと飛んでゆく。日差しを浴びてきらきらと、ゆらゆらと今にも弾けそうであるが、その一瞬を「ふたつめの太陽」と捉えた俳人としての感性がシャープであり、ユニークである。

入選

地球といふ一舟天の川を漕ぐ

芳谷 妙子

宇宙人と握手弥生の月の夜

村上 真智子

宇宙よりころげ落ちたる天道虫 ※

赤穂 和子

肩車オリオン座まで手を伸ばす ※

田中 祐輔

鳥帰る宙の深きへ翼張り ※

篠田 千恵美

揚雲雀宇宙の果てを目指しけり

宮崎 謙一

宇宙基地へと朝顔の蔓の先

松本 麗子

芋の露宇宙まるごと転がしぬ

小田原 京子

竜天に人は宇宙にひるがへる

武田 誠子

着ぶくれて宇宙の街を闊歩せり

増田 朋子

※印は複数の選者が選んだ句

特選

銀漢や砂丘の涯の日本海

東温市 戒能 多喜

評

砂丘から見た景であろうか。〈砂丘の涯の日本海〉の深い碧。空には唯一宇宙の川といわれる天の川の無数の星のきらめき。雄大な、そして遙かな思いに誘われていく。簡潔な表記、拡がりのある景に惹かれた。

春満月のぼる大きな旅鞆

松山市 原田 マチ子

評

〈大きな旅鞆〉これを持ってば月の世界に行けるのでは…とふっと思う。そうした夢のような思いに誘われるのも、春満月の親しさであろう。ほのぼのとしたあたたかさ、春満月ならではの句である。

オリオン皓と大阿蘇の野焼あと

松山市 渦岡 くみ子

評

昼間多くの人が関わったであろう〈野焼〉の果て、今は寂寞とした野焼きの景。天上には三つ星が何事もなかったように、しずかに強く光っている。古事記の時代から続く行事。人間と自然との交感に感動をおぼえる。

入選

佇めば飛梅の香の虚空かな

毛利 珪子

北国の旅の一夜や銀河濃き

荻山 政躬

鳥帰る宙の深きへ翼張り※

篠田 千恵美

南十字星から届いたハンカチーフ

堀 アンナ

春星の生るるよははを想ふたび

毛利 敦美

冬銀河父のなき子と肩ならべ

楠崎 陽子

シリウス仰ぐマフラーをきりきりと

橘 信子

光年を想へば微熱桜咲く※

忽那 早苗

岬来て触るるばかりの冬銀河

岩田 勇

ペンギンの背はしなやかに春の星

瀧谷 弥可

※印は複数の選者が選んだ句

特選

望遠鏡のぞけば素顔春の月

松山市 杉山 望

評
肉眼では見えない月面の地勢や月面図にある海の位置などが精度の高い望遠鏡で観察される。見慣れた月がこんなふうになっているのかと驚くのだが、特におぼろに霞んだ美しい春の月の素顔には落胆したかもしれない。

耕せる青き地球を攪りて

愛知県 斉藤 浩美

評
種まきや植付けをする前に土を鋤き返してやわらかくする耕は春の季語。その耕は、青い地球といわれている、われわれ人間の住んでいる天体をちよつと操っているようなものだと思えた。なかなか面白い表現をしている。

はるかなる宇宙のリズム潮干狩

東京都 山本 好夫

評
月および太陽の引力により周期的に起こる潮の満ち干により干潟が現れる。陰暦三月三日ごろの大潮のころには潮干狩で賑わう。干潟を見てとつさに宇宙のリズムとは考えないが、そこに着目した新鮮な佳句。

入選

火星からの電波を受けてゐる木の芽

柿崎 巍

オリオンの腰の宝石星生る

山内 秀紀

冬銀河地球が回つてゐるなんて※

池川 紀子

しんといふ音のきこえし星月夜

渡部 和也

地球似の惑星七つ水温む

野村 タカ子

オーロラを見おろして春宇宙船

木村 たみ子

宇宙への旅に金魚と歳時記と

浜田 真理

啓蟄や宇宙に人の目覚めをり

武田 誠子

天高し望遠鏡のクレーター

松下 喜彦

宇宙からこだまでしょうか春一番

古山 礼子

※印は複数の選者が選んだ句

特選

宇宙よりころげ落ちたる天道虫

松山市 赤穂 和子

評

宇宙という無限大のどこから、天道虫がころげ落ちてきたという句に惹かれた。そもそも天道虫という名こそ、宇宙を意味するものであった。春になると現れる天道虫、異星人の一種かもしれないと真剣に考えた。

春星のうるむ竹取物語

松前町 森田 千重子

評

暖かくなると天も地も海もぼんやり霞む。潤んでいる春の星を見あげ、かぐや姫が月に還った竹取物語を思いだす。そう、宇宙から地球に還った向井千秋さんは、月に還ったかぐや姫と同じように美しい地球を見たのだ。

鼻を目覚めさせたる天文図

兵庫県 中川 多聞

評

人間は東西南北を星の位置で決め、太陽や月の動きで時間を決めた。この天文図とは地球から見た星座や星雲の図であろうか。鼻は夜空に天文図がかぶ頃に目覚め、人間と入れ替わって夜を支配する。

入選

鳥引くや古墳に残る天体図※

岡本 典子

抽斗の一つは月光溜めるため

田村 七重

光年を想へば微熱桜咲く※

忽那 早苗

桐箱にしまふ臍の緒春の月

和泉 厚子

何もかも浮かぶ宇宙に豆を撒く

松田 かをり

満点の星動きだす大きくさめ

山口 初雄

月蝕のおぼろの中を宙返り

岡本 久夫

逃げ水やみたかも知れぬ宇宙人

中川 加奈子

春の宵猫が伸びする宇宙まで

大坪 覚

卒業でほほに流れる天の川

古賀 大希

※印は複数の選者が選んだ句

特選

鳥引くや古墳に残る天体図※

松山市 岡本 典子

評

太古の昔から人類は宇宙に興味を抱き、夢を紡いできた。古墳の中に画かれた星宿図はそれを物語る。北の大地へ長い旅をする鳥たちのように、人類が宇宙を行き来する日もそう遠くないかもしれない。

冴返る今は滅びし赤き星

宇和島市 山本 ことみ

評

何千・何万光年もの遙か彼方から地球に届く星の光。今、冴え返る夜空に明るく輝く赤い星も赤色巨星として終焉を迎え、爆発して跡形も無くなっているのかもしれない。時間と空間の果てしなさ感じさせる句。

たんぽぽや何処かに地球のような星

松山市 加藤 真理子

評

地球によく似た星が発見されたというニュースを聞いたのはつい最近のこと。宇宙には地球型の惑星はいっぱい幾つあるのだろうか。豊かな水が流れ、蒲公英のような愛らしい花が咲いている星もあるのかもしれない。

入選

旅客機の窓に溢れる冬銀河

中田 悠太

シリウスのまたたき青き岬かな

岡本 千秋

春立ちぬ太白星のきららかに

平尾 京子

肩車オリオン座まで手を伸ばす※

田中 祐輔

惑星へ旅する話蜜柑むく※

武井 日出子

湯豆腐や銀河の底にわれひとり

西分 慶雄

太陽系第三惑星春時雨

村下 満

春風まとふ千年あとのかぐや姫

石原 悦子

十六夜や買って五年の月の土地

西川 タモツ

千億の星北半球は春を待つ

水谷 均

※印は複数の選者が選んだ句

特選

惑星へ旅する話蜜柑むく

松山市 武井 日出子

評

宇宙への旅、月への旅はもう現実味を帯びて来ています。私達には出来なくても孫の時代のハネムーンは宇宙旅行も選択肢の一つになっていくかも知れません。炬燵で蜜柑をむきながらの一家団欒の一場面と思われま

天地も過去も未来も臃かな

松山市 岡田 早苗

評

過去も未来もそして現在生きていく天地もみんな幻なのです。私達は宇宙のほんの一部分しか知りません。臃を抜け臃の中に生き臃に紛れて行くのです。私の句に、抜けて来し臃紛れて行く臃があります。

宇宙より賜はるひかり梅ひらく

松山市 松田 とよ

評

地球は太陽の光を受けて輝いています。地球に生けるものすべて例外はありません。その事に作者は気付かれました。誰も皆知識としては知っていますが気付かずにあります。その事に梅の小さな花が気付かせてくれました。

入選

光年といふ遙けさよ星流る

岡本 典子

銀漢や砂丘の涯の日本海※

戒能 多喜

天の川平和の鐘が響きけり

和泉元 良彦

宇宙より帰還の金魚ひらひらり

福本 伊都

冬銀河地球が回ってゐるなんて※

池川 紀子

宇宙まで飛んで行けさう春日傘

大本 早美

宇宙への夢を育てて卒業す※

忽那 早苗

冬銀河道後温泉湯気立ちぬ

黒田 美奈子

コオロギと午前三時の流星群

猪野木 凜

ソーダ水私の宇宙かき混ぜる

清家 希

※印は複数の選者が選んだ句

宇宙俳句 《一般の部》 渡邊 孤鷺 選

特選

鳥引くや古墳に残る天体図※

松山市 岡本 典子

評

奈良県飛鳥村の特別史跡キトラ古墳の天井には、現存する世界最古の本格的な星図とされる天文図が描かれている。この句は、読む者を天空ではなく地中深くに誘導し、そこに展開される宇宙を照覽させる異色の句である。

宇宙への夢を育てて卒業す

松山市 忽那 早苗

評

夢を育てたのは幼稚園か最終学歴となる大学か。幼稚園であれば夢の実現はまだまだ遙か先のことになるが、大学だとすればいよいよ夢の実現に向けての現実的な第一歩となる。この句の「卒業」の措辞から想像が広がる。

御霊星うるみて春の闇深し

松山市 原田 和子

評

「御霊星」とは自作の言葉であろう。亡くなられた身内の誰かを仮託する星である。春の闇が深いだけにその星の瞬きは一段と冴えているが潤んでいるようにも見えるのである。それは星のせいかな自分の帯びる涙のせいかな。

入選

かくまでも宇宙美し星冴ゆる

大澤 慎士

寒北斗父母へ会ひゆく道標

弓矢 登志子

光年のかなたに温む水やある

川島 洋

宇宙よりころげ落ちたる天道虫※

赤穂 和子

億年の寿命のひかり星冴ゆる

三好 眞喜子

永らへて青き地球を見るおぼろ

稻積 和子

あたたかやJAXAに買ひし宇宙食

武田 誠子

四十光年先に亀鳴く星のあり

渡部 伸子

幼子の夢は宇宙士冬銀河

松田 かをり

たんぼぼの絮は放たれ宇宙旅

山本 啓

※印は複数の選者が選んだ句

愛媛県立図書館 真鍋博コレクション展示

期 間:平成29年6月3日(土)～6月7日(水)

場 所:ひめぎんホールエントランス

概 要: SFや宇宙を題材にした挿絵や作品を数多く残した愛媛出身の画家 真鍋 博 氏の功績を伝え、開催地愛媛のPRに繋げるため、愛媛県立図書館所蔵の貴重な資料を展示。

～真鍋さんが語る「宇宙」～



愛媛県立図書館の展示の様子

松山市立図書館「宇宙」に関する図書展示

期 間:平成29年6月3日(土)～6月7日(水)

場 所:ひめぎんホールエントランス

概 要: JAXA職員や宇宙の専門家がおすすめする宇宙関連図書の紹介や松山市立図書館所蔵の「宇宙」に関する図書を展示。

～本の中に広がる宇宙！～



宇宙に関する図書展示ラック



図書を手にする一般客

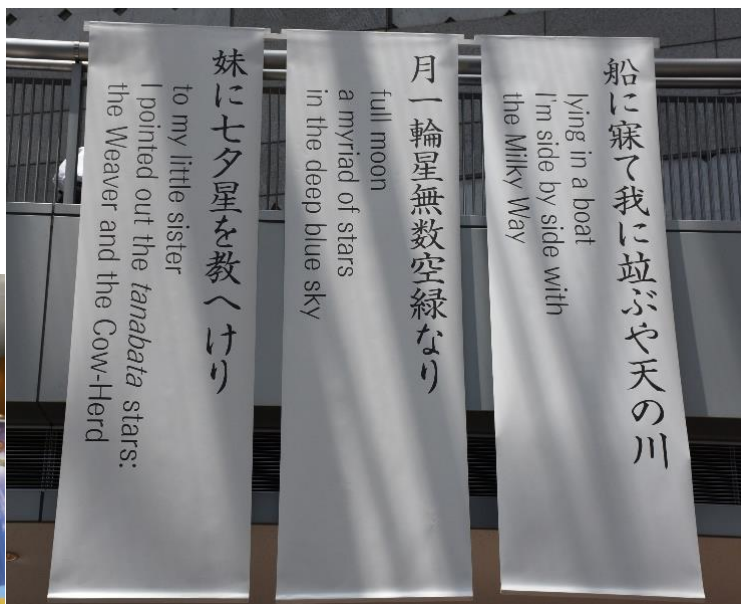
子規が詠んだ「宇宙」俳句展示

日 時:平成29年6月3日(土)～6月7日(水)

場 所:ひめぎんホールエントランス

概 要:子規・漱石生誕150年を記念して、正岡子規が詠んだ星や月など「宇宙」を連想させる俳句に英語翻訳をつけて会場に展示。

～子規が見上げた宇宙(そら)～



企業展示スペースやイベントステージの上に展示

水素自動車MIRAI見学会

日 時:平成29年6月3日(土)～6月7日(水)

場 所:ひめぎんホール前広場

概 要:岩谷産業株式会社 の提供により水素自動車MIRAIを会場前広場に展示し、見学会を開催。



水素自動車MIRAI

春や昔十五万光年の宇宙から

松山に本物の宇宙がきました。

H-IIA ロケット
H-IIA Launch Vehicle

H-IIA
JAPAN

ISTS 国際宇宙展
平成29年6月3日~7日
午前10時~午後5時
於: ひめぎんホール

第31回
宇宙技術および
科学の国際シンポジウム
愛媛・松山大会

水素自動車
「MIRAI」

~ロケットから車まで、
未来を動かす水素の力~

協力: 岩谷産業株式会社
四国岩谷産業株式会社
愛媛トヨタ自動車株式会社

第31回
宇宙技術および
科学の国際シンポジウム
愛媛・松山大会
2017.6.3~6.9

ISTS
国際宇宙展